

随筆・雑記類について：和漢書貴重図書目録の周辺

大原 理恵

はじめに

東北大学附属図書館では、平成17年度に貴重図書目録と漢書篇を刊行した。このことは、すでに附属図書館広報誌『木這子』に簡略な報告をした¹⁾。そこで詳細な報告を作成することを予告し一部は公表した²⁾が、『木這子』が編集方針を変更し、そうした報告を掲載すべきところではなくなった。また貴重図書目録の凡例に「その他の改変事項・参考文献等については、東北大学附属図書館報『木這子』に掲載予定。」と注記し編纂方針等の公表を予定していたが、これも果たしていない。今後場所を改め既発表部分も改稿した上で公表することを検討している。今回この状況をお詫びするとともに、序説として、貴重図書目録をめぐる課題などを記しておきたい。

1. 貴重図書目録について－冊子体目録は必要か

和漢書貴重図書目録刊行の際、根本的な問題となったのは、電子目録が一般化する中で冊子体目録刊行はそもそも必要なのかということであった。過去に作成したカード目録等を保存し、紙媒体の目録を複数作成しておくことは、非常事態の備えとしても重要である。だが、日常利用する目録としては意味があるのか。平成10年代の段階では電子目録に馴染まない研究者は少なくなかったから、現在の要望はある。しかし、将来はどうであろうか。目録刊行が現実化する頃には、冊子体目録はむしろ貴重図書データベースの付録のような位置づけになっていた。このことと矛盾するようだが、冊子体目録は平成18年3月に刊行・配布され、電子目録は現在公開されていない。

貴重図書目録の編纂を開始した時には、データベース作成の作業も同時に進めていたから、冊子体

目録と電子目録の役割分担について検討する必要がある。「冊子体目録はデータベースから印刷すれば、簡単にできる」といった声もあった。それは事実でもあるが、冊子体目録を作成するからには、データベースから機械的に作成できる目録とは違った性質のものであるべきだと考えた。電子版は機械的にマニュアルに従って作成できるように、一方冊子は機械的にはできない要素を組み込むことを考えた。例えば五十音による配列は、従来の附属図書館の貴重図書目録³⁾では主要な配列方法であるが、機械的にできる。今回の目録では意識的にそれ以外の配列方法をとることを検討した。このような方針をとるならば、電子版は多数で作成するのに適し、冊子体は少人数で作成すべきものとなる。

電子目録がどのように進化するか明確な見通しがあったわけではないが、貴重図書の点数であれば、冊子を手にして人の目で検索することは、古典籍については有効な部分が多いはずであるとは思われた。逆に、この程度の点数でデータベースを作成しても、有用なものにはならないのではないかという危惧があった。冊子体編集にあたりこの「人の目で、人の手で」ということは殊更に意識した。例えば、同種あるいは関連する資料はなるべく見開きに納めるようにした。必要に応じて複写利用することを想定して、複写しやすい装丁とした。このために工夫もしたが無理もした。「人の目で」と主張する割には文字が小さい。書き込みの余裕は全くない。従来の附属図書館貴重図書目録は十分な余白があり、事務用のそれには細かな書き込みがなされた。今後は書き込みには電子目録の方が適切であろう。修訂増補の状況を逐次的に公開するのも電子版がふさわしい。冊子体は、頻繁には改訂されない基本事項に絞って記述し、また貴重図書の全体像や本来の体系を見

やすく提示することを目的とした。

平成 17 年度版貴重図書目録では、貴重図書を指定理由に合わせて、四つに大別している(目次参照)。①古写・古刊本②原本稿本③書画画図④稀本(刊本)である。所謂随筆・雑記は、②原本稿本に入る。本人の自筆稿本が数点指定されている場合には、著者でまとめて配列した。内容上書画に関する記事が中心であると判断されたものは③書画画図の「書画」に分類した。その他のものを、分類項目は立てていないがかためて配列した。随筆・雑記類は点数でも貴重図書のかなりの割合を占めている。分量(丁数の合計)で計れば相当なものになる。この塊に向き合った時、問題が小さくはないことに気づく。

2. 随筆・雑記類について—貴重図書目録の「余白」

随筆・雑記類については、この貴重図書目録はあまり有効ではない。書名からは一部の著名なものは別として、和漢の故事を典拠とした風流優雅な名称に心誘われることはあっても、要するに随筆・雑記類であるということしか分からない。著者名は手がかりとはなるが、折角手続をして閲覧した利用者を失望させることもないとはいえない。優れた学者や作家であっても、日常の手控や勉強ノートは、つまりは平凡であることもまた当然である。まして、どのような人物の手になるのかわからない随筆・雑記をわざわざ閲覧してみようと思わせるような工夫を、この目録に加えることはできなかった。

随筆・雑記の原本を手にする時は、その他の写本とは異なる独特の期待感が湧く。表紙の書名からはほとんど何も分からない。源氏物語の写本ならば、重要な伝本であっても、そこに何が書かれているか予め分かっている。源氏物語の注釈書であれば、未知の記述が含まれていることもあるが、おおよそどのようなことが書かれているか想定できる。随筆は開けて見るまでは分からない。第一丁を見ても、第二丁に何が書かれているか、予測できない。随筆筆者の持つ自由性は、読者の前には未知性として繰り広げられる。

そうした原本には白紙が何枚も綴じ込まれていることがある。白紙の方が多い場合などには記述の少なさを残念に思いながらも、そこにも感興を覚えることがある。電子画像やマイクロフィルムで、延々と白紙の映像が続けば腹立たしいだけではないか。綴じ込まれた白紙は、電子画像やマイクロフィルムのそれとは異なり、実際にはあり得ないことであるが、今なおそこに何事かを書かれうるものとして、筆者が書くつもりであった何事かの広がり想像させる。

余白の意味を考えるのであれば、附属図書館の新旧の貴重図書目録をながめていただきたい。従来の貴重図書目録が贅沢に思われるほどの余白をとっていることから、編纂者がこれをどのように位置づけていたか推し量られる。この余白は、貴重図書目録に相応しい品格を加えるとともに、さらなる記述や貴重図書自体の増補を期待しているのである。平成 17 年度版目録は余白を持たないが、それが不要であると考えていたわけではなく、その役割は別なものに委ねることにしたのである。

随筆・雑記資料の利用を促すにはいくつかの方法がある。解題作成などは基本的な方法である。附属図書館では、蔵書の随筆索引を作成し参考調査に活用してきた。『未刊随筆 68 種索引』(矢島玄亮編、参考資料 第 61 号、東北大学附属図書館、昭和 39 年 3 月)は写本のそれである。

[矢島氏作成の参考資料類について]勿論索引類の中には氏も自認される如く、個人技に由因する欠点も存するかも知れず、また新纂の同種資料の出現によってその利用価値を減じてくる場合もある。しかし「漢詩索引」やいくつかの随筆索引、或は「難読姓氏」の如きは、現在においても学界および館界に需要の多いことも衆知のことである。

「図書館の矢島玄亮先生」石田義光、図書館学研究報告1、東北大学附属図書館、昭和 43 年 9 月 p.7

その後研究も参考調査のあり方も変化し現在の有用性は簡単には計れないが、こうした財産を次の世代に引き継ぐことも考えられよう。

図書館には翻刻を心楽しいものとし、あるいはそれは労力面から困難としても画像公開をと考える方は少なくないであろう。特に挿画の多いものなどは、既に候補となっているかもしれない。しかし、実際にそれだけの内容的価値がなければ、量が多だけに、利用者の観点から厳しい言い方をすれば邪魔にさえなりかねないが、その判断は難しい。

手当たり次第に新古の書物を抜書して何々随筆などとしてあるには誠に困る。自分は曾て内閣文庫を整理する際に、此類の雑抄ものを普通の著述から区分するにえらい骨折をした。(中略)全体随筆と云ふ者には概して保存の価値あるものが少ない。(中略)分類もして無ければ総合もして無い。徒らに我々孫引学者に重宝がられる迄である。

「古書保存と郷土」柳田國男, 柳田國男全集7, 筑摩書房, 1998年, p.355~366

江戸では(中略)なほ秦の始皇をして啞然たらしむるほどの写本類の分量が、維新に瓦解した沢山の旧家から流れ出し、それが震災直前までは市中にも溢れて居た。(中略)内閣文庫なども、以前予算の潤沢であつた時代には、つい買ひ過ぎるのでよほど警戒をしてみても、又しても無用の写本を背負ひ込んだものらしい。それには古本商の不正直も手伝つてみたと言つてよい。(中略)中には大部の書の二節三節を継ぎ合せ、又は書き続けて見たものもあつて、それを発見するには記憶のよい専門家を必要とする。(中略)一たび之を紹介して世上の公器としようとするからには、永く後代の読者の為は無用の煩勞を省くべく、むしろ選抜の稍厳に失するを力むべきである。「郷土叢書の話」柳田國男, 柳田國男全集7, 筑摩書房, 1998年, p.361~p364

附属図書館の蔵書にもこの類のものが無いとはいえない。写本の価値を実際以上に見せかけるため華やかな装丁や装飾が施されることがあるが、随筆ではかえって、装丁のひかえめな趣向の魅力が、書物に携わる者の判断を誤らせるように思われる。たくらみを持つ者がそうした書物を差し出してきた時、咄

嗟の判断で退けることは想像する以上に困難であつたのではないか。書物に関する営為に携わる者は、そうした趣向を喜ぶ感覚が必要であるが、同時にそれに欺かれる場合があることを自覚していなければならない。附属図書館の貴重図書は最初は短期間で選定を行ったものと推測されるが、随筆・雑記類については、装丁の趣向も判断の手がかりになっていたかもしれない。調査をすれば貴重図書の基準を満たしていない資料も見いだせるが、それでもかすかな「手がかり」から貴重図書を選び取った感覚はなお尊重しなければならない。

3. 随筆・雑記類の利用—漫然と読み漫然と写す

柳田の随筆批判にはさまざまな文脈がある。近代的な学問方法の確立の問題でもあつた。文献資料の扱いの問題でもあつた。

私の一番長い間苦心をしました点は、どうも仲間の人が随筆家風な学者になりがちなことでありました。

自分が第一、世間から長い間随筆専門業みたいには言はれてゐるのです。(中略)そんなわけで、世間からは随筆風に見られますし、内輪でもつい随筆的にやつてしまふ虞れがあります。最近の五六年間といふものは、この傾向と闘ふのが一番大きな苦心でありました。

「民俗学の話」(一人座談)柳田國男(初出 日本評論16-2, 日本評論社, 昭和16年2月) 柳田國男全集30, 筑摩書房, 2003年, p.417

ちやうど此本を書いた頃、私は千代田文庫の番人をして居た。さうして色々の写本類を、勝手に出し入れをして見ることが出来たのである。斯んなにまで沢山の記録を引用しなくとも、もつと安々と話は出来たのであるが、(以下略)

「[山島民譚集, 大正3年初版]再版序」(昭和17年7月)柳田國男, 柳田國男全集2, 筑摩書房, 1997年

しかし図書館としては、厄介者にもなりかねない随

筆類をどのように評価し扱うかが問題となろう。典籍を研究の主たる対象・資料とする者には、今も抄写は基礎作業の一つであり、随筆的知識整理になじみやすいところがある。やはり随筆類はそれほど優れてはいないものでさえ、それなりに重宝である。だが例えば、現在東北大学狩野文庫の書庫で「写本類を、勝手に出し入れをして」抜き書きの作業に没頭することができるであろうか。また、そうあるべきであろうか。これは図書館側だけの問題ではなく、研究者が古典籍を利用のあるべきかたちをどのように考えているにもかかっている。

戦後何もしないで、ぶらぶらしてみた折のことである。纏った仕事などは到底手に付かぬ。江戸時代の随筆類でも読直して見ようかと思いつて、(中略)たゞ読むだけでは忘れてしまふので、紙も自由に手に入らぬ時代であつたのだが、人から貰った藁紙のあつたのを幸ひに、それをやゝ大形のカード大に切つて、細字の書抜を作つて行つて見た。始めて見ると、存外その仕事に気乗がして、それから毎日を、殆どそのことに没頭した形で送つたが、六七百部ほど読み進んだところで、新しい勤が出来たりして、その閑事業はいつとなしに放棄した形となつてしまった。

「随筆とは何か」森銑三、森銑三著作集 11, 中央公論社, 昭和 46 年, p.9

柳田先生の勉強法はカードを使用することであつた。聞きとられた或は写しとられた資料はすべてカードに書き改めて分類し、紙袋に入れておく。そのカードたるやいたって粗末なもので、ザラ紙の西洋紙を四つに切つた、それだけのものである。

「柳田先生と折口先生」岩崎敏夫、柳田國男全集 2 月報1, 筑摩書房, 1997 年 10 月

ザラ紙をカードとしたことは、柳田を尊敬する人々には彼の質素さを示すものであり、柳田からすれば雑抄・随筆的営為から明確に区別するための姿勢でもあつたのであろう。森氏が手にした藁紙は紙が不足していた時期でもありやや感触が異なるように思う。いずれにせよ、随筆に向かうには、差し当たつての

目的に縛られない姿勢がふさわしい。

なお本書に採録した随筆書にしても、私の希望としては、もっと原文の引用を多くして、本書を以てのどやかな気分の横溢した、辞典らしからぬ辞典としたかつたのであるが、そのような勝手な註文は容れらるべくもなかった。(中略)辞典の名に捉われずに、これを一の読物として取上げ、漫然開いた箇所を毎日一項づつでも読んで、二三年がかりで、全巻を読終えようというような特志家でも得られたら、どのように喜ばしからうか。

「はしがき」森銑三(昭和 36 年)、随筆辞典 解題編、東京堂出版、昭和 36 年初版 昭和 60 年新装再版、p.8

本来のあり方で随筆雑記類を享受するためには、それだけの知的余裕——漫然と読んだり漫然と写したりが日常的にできるような——が必要であるが、現在の大学構成員にとってそれは理想でしかないのかもしれない。しかし、どこかにそうした随筆雑記類の性質に適したシステムを組み込むことは可能なはずである。

4. 活版本への移行の時代に

貴重図書の中には、近代の資料が含まれているが、そればかりではなく、古典籍資料もさらに近代の色彩が加えられていることがある。

明治四十三年始めて内閣文庫の管理を命ぜられた時に、(中略)実に厄介千万なる事件の一つ引継いだ。(中略)其原本を内閣文庫から借りて、それを其儘活版の原稿にしたばかりか、実に悪筆で異本を校合し、中には鉛筆で符号などを付けて、墨だらけにして綴糸をほごしたまゝ返して来たので、(中略)其態度が又如何にも無邪気なもので、是はネ君、非常にわるい本で、時々二三行もぶつとばして写してあるのですよ。今度うちの活版本が出さへすれば、忽ち反故にしてよい本なんです。(中略)書物などは書画とは目的がちがひ、世人に読ませる為には、時としては兎が身

の毛をむしって巢を作るやうに、次の代の為殊に学問のためには、損失を厭ふに及ばぬ場合さへある。「郷土叢書の話」柳田國男、柳田國男全集7、筑摩書房、1998年、p.382~383

文脈から切り離せばこれは単なる横着でしかない。活版本にうつしかえれば元の写本は不用であるなど今となっては容認できない主張である。だが、ありふれた写本版本に対する当時の感覚はおそらくこのようなものであり、その一方で、活版本にうつしかえることは書物の近代化という輝かしい事業と見えていたのではないか。

附属図書館所蔵の古典籍にも、近代の書き込みや改変のあとがしばしば見られる。活版本の原稿またはその準備のための校本として利用されたいなものもある。古人からすれば、当然のこととして次々と改変を加えられ伝えられている古典籍に対し、原態に拘る現代の頑なさや奇異に見えるかも知れない。

貴重図書も例外ではなく、悪質な小細工さえ認められる。こうした改変は、貴重性を低下させるものとして残念に思われるであろうし、資料を損なうほど不適切なものは補修等によって改めるべきではあるが、小細工も含めてそれもまた書物を巡る営為ではある。たしかに鉛筆の書き込みや洋装本風の装丁は和本になじまないが、江戸文人の営為なら珍重し、明治の学者の営為なら非難する根拠はない。(念のために付け加えるが、これは過去の営為の痕跡を評価する場合であって、現在の研究者が同様のことをしてもかまわないという意味では勿論ない。)

狩野文庫は江戸学の宝庫といわれるが、そうした観点からは、明治の営為の産物でもあり、比較的明治期の資料の少ない附属図書館本館書庫にあっては、むしろ明治の匂いの濃厚な一角とも見なされる。この明治の匂いを感じないで、江戸に直接触れていると思うならば、それは一種の錯覚であろう。

狩野亨吉自身は、活版本への移行をどのように考えていたのであろうか。狩野は近代の全集編纂には距離を置いていたのではないかという解釈がある。

〔明治〕36年頃から文学に限らず文化の諸領域について「全集」が続々と刊行されだしました。しかしどういふわけか狩野氏は京都帝大文科大学長の栄職にあり、めぐまれた経済状況にありながら、それらをあえておしよけて買いません。(中略)

印刷・出版の進歩にすがって「全集」を出せば得々として能事おわれりとする風潮に抵抗を行ったのであろうと思います。これが私の解釈であります。全集を編集する暇があったらその原資料を探訪し、それについて研究をおこなうべきだ、というのがその立場であつたらうと私は思います。

「全集」と「狩野文庫」原田隆吉、原田隆吉図書館学論集、雄松堂出版、1996年、p.382~383

狩野の原本活字化への眼差を知る手がかりは多くは無い。目録編纂作業の一環として貴重図書活字化の状況について調査した。貴重図書には閲覧制限があるので原本によらずに利用者が内容を読むことが可能であるかを調査するのが第一の目的であり、また原本に対する評価を確認する意味もあった。蔵書が活字化される場合は必ず附属図書館に申請されるので、図書館においては情報が自然に網羅的に蓄積されるはずである。当初はそうした性質の情報として調査を進めていたが、やがて疑問が出てきた。これでは、活版本を原本の代替とのみ見なす発想に過ぎない。活版本には原本とは異なる独自の意義を認めるべきではないのか。

もし、活版本を研究者が二流の代替資料としてのみ扱っているのであれば、それは、写本・版本の活版本へのうつしかえに未だに成功していないということの意味する。仮に、近い将来電子書籍が主流になるとしたら、活版の歴史の浅い日本においては、未来の書誌学者は活版の時代を過渡期として処理し、かつての古活字本の時代を見るような眼差を向けるのであろうか。

注

1) 『平成十七年度東北大学附属図書館本館所蔵貴重図

書目録和漢書篇』の刊行について」東北大学附属図書館報「木這子」第31巻第1号(通巻114号)平成18年6月

- 2) 「東北大学附属図書館和漢書貴重図書目録の刊行について(その一) -昭和11年版『和漢書別置本目録未定稿』の刊行-」東北大学附属図書館報「木這子」第32巻第1号(通巻118号)平成19年6月
- 3) 『和漢書別置本目録 未定稿』昭和11年 『東北大学附属図書館別置本目録増訂稿』昭和36年

(おおはら りえ, 学術資源研究公開センター・史料館助教, 附属図書館協力研究員)